台北俳句会会長 黄霊芝先生を偲ぶ

杜青春

黄霊芝先生は去る3月12日にご登仙されました。台北俳句会永年の会員方々の思いをここでご紹介致し、霊芝先生の御人徳を偲びたいと思います。
以下、「黄霊芝追悼文集・句集」台北俳句会編より会員からの追悼文を抜粋します。

黄霊芝師逝く

呉昭新　謹誌

戦後台湾唯一の日本語俳句会の主宰である黄霊芝先生が3月12日急逝なされました。その弟子たる私も一言述べなくてはならないと言われました。

私が弟子であった期間はほかの大部分の方に比べればあまりにも短かすぎました。79歳で入会し2009年の末からのわずか六年ばかりである、それも師が体調を崩してからのことであり、それゆえ師の教えに直々与かったのは初めの一年ばかりで指折り数えるほどしかなかった。弟子入りする前から師のご高名は窺い知っており、著作も読んでおりましたが、入会後特別に師より頂いた多くの師の傑作より師の小説、詩学、芸術の造詣をより深く窺い知ることができました。ただ日本語を少し話せるだけと言うことで誘われて入った句会でしたが、もともと何かやりだしたらのめり込む性質なのでネットの上で手に入る俳句の資料を片っ端から読み漁り、ベテラン会員の陳錫恭氏（大学の英語教授）ご自身が勉強なされた俳句の資料や新しい俳句の入門書などをわざわざ台中から送って頂き、そして自分でも日本の古本屋から必要な資料を郵便で購入し、日本の俳人で漢詩詩人でもある畏友石倉秀樹氏（漢詩を三万首以上詠んでいらっしゃる）とメールで何十回ものやり取りで俳句の本質についての議論を交わし、指導に与かり何とか俳句に関する知識の習得に励みました。俳句の天賦の才の無い私ゆえ俳句の作品には特に提起しうる作品はありませんが、俳句事情については日本及び世界中の状態を一般の方よりは一応納得しました。特に日本の国内での事情については日本の俳句を四、五十年詠んでいる一般の方よりは詳しい事情を知り得た筈でした。日本で俳句を詠んでいる方は大まかに二つのタイプがあります、一つは俳句を詩として詠んでいらっしゃるプロの方ともう一つは趣味として俳句を詠んでいらっしゃる方（大衆化）に分けられます、で後者の方が大多数を占めています。それらの人たちは所謂伝統俳句の決まりだけが頭にこびりついて、ことごとに季語、五七五、切字ばかりを気にしており、俳句の本質については考えが及ぶことは稀でした。小林一茶をはじめ、河東碧梧桐、荻原井泉水、種田山頭火、尾崎放哉、中塚一碧楼、石田波郷、吉岡禅寺洞、加藤楸邨、日野草城、嶋田青峰、東京三、山口誓子、鈴木六林男、金子兜太、芝不器男、高柳重信らは念頭になく俳人とは認められていないようです。ことさら人間探究派や難解俳句などは相手にされません。それゆえ俳句を詠みながら俳句の本質や真髄などに思いが及び寺田寅彦、折口信夫、正岡子規、高浜虚子、長谷川櫂、夏石番矢らの詩論、俳論を何回か読み直しました、自然一般俳句会、結社の営為にも思慮が及びました。ある程度進みますと俳句とは瞬間

の感動を一番短い言葉で韻文に詠むことであり詠む人と読む人により読み取り方が違うのに気づき、世界の各言葉（日本語も含めて）に詠まれるためには花鳥諷詠、客観写生だけに拘らずもっと広い思惟で詠むべきだとの結論に達しました。この考えをまとめて一文にして黄先生におおくりしました。その後先生の発言で会員の方には聴力が落ちている方もいらっしゃり意見の交流が難しいこともあると聞き及び、自分のことをおっしゃっているのだと感じましたが、先生も自分もお互いに体力がままならずなかなか直接に教えに与かる機会がありませんでしたが、今年の１月の句会で下岡友加氏編集の《黄霊芝小説選２》（2015 年 8 月出版）を手にし、その中唯一の書き下ろし文章《俳句自選百句》の冒頭で黄霊芝先生が：これらの作からもわかるように私は必ずしも五七五の定型に屈服していませんし、季語の虜になってもおりません。《そして最後に》もう一言加えたい。五七五は定義ではない。そして同じ文芸界に属する小説の世界では定型に縛られることなく、むしろ一作一作風をこそ手柄とするのではあるまいか。と締めくくっていました。

まさしく青天霹靂、私は今の今まで黄先生を百分の百の伝統俳句の擁護者でありまた結社の主宰と信じていました。いや僕だけではない句会のほとんどの方がそう信じてきたのだ。私は胸を撫で下ろしました、台湾唯一の日本語俳句会の主宰で私が尊敬する師匠があの狭い一個人の主張の伝統俳句でなく、もっと広い意味での俳句の真髄を極めていることを知り、また世界で流行っている俳句も決して全部が全部真実の俳句ではなく、日本の方々をも含めて世界の方々が真実の俳句、そして俳句の真髄を求めており、そして世界が尊重してくれている日本発想の《俳句》を日本人は大切にすべきであると言うことを心の底から感じたからだ。

黄先生の人生の最後の一文が拙文に対するお答えであると共に先生の俳句の真髄に関する真の考えとその証左であるのだ。わたくしが拙文《台湾俳句史》で述べた如く黄先生は間違いなく俳句の真髄を極めていたのだ。過去 45 年間台北俳句会の主宰でありながら会員の趣味、気持ちを重んじて敢えて俳句の真髄には触れなかったのだ。其の心のやさしさを感じさせられざるを得ません。黄先生に関する一切はすでに拙文《台湾俳句史》及び《台湾俳句史補遺》に述べてあるゆえここでは控えさせて頂きます。心から先生のご冥福をお祈りしています。

師の逝きて草山空の朧月
しとしとと春雨に逝く霊芝師や
自信持て歩き過ぎたるこの一生
黄霊芝師はにこやかに逝く

縁

高阿香

黄霊芝先生と私とは同郷の誼で生意気盛りの中学生時代を古都台南で過した些かの縁があります。先生の従姉は私と同期ですから私の方が少し年上の筈ですが、それとは関わりなく私は文学に精魂を打込む先生を尊敬し、その厳しい御指導の下で俳句の道に励んで参りました。

不得手な会計役に選ばれた時、お断りしたら「これは誰にでも任せられる役目ではないから」と押しつけられて今日に至りました、古びて破れかけた帳簿の語る俳句の歴史は黄霊芝先生の急逝によって終止符を打たねばなりません、貧しい句会でしたが、師弟共によく頑張りました。日台交流に大きな功績を残し、数多の勲章に輝く台湾の詩聖にもう少しの時間が欲しいと残念でなりません。

台湾に不可思議な雪が降りました、80 代 90 代の老俳人が消えても雨後の筍のように若手の俳人が続続輩出するような奇蹟が起るかも知れません。私達はそれを期待致しております。

天翔ける弥生の空は幸くあれ
仙人は気ままなものよ春うらら
あの世にて仲よくせよと花吹雪

黄霊芝先生へ弔句と弔文　黄　葉

霊芝先生の姉上陳候鳥さんが亡くなられた時遺句集に戴せる句選びのお手伝いをした事がありました。候鳥さんの家へ行きますと、もう床は一ぱいに紙かノートが散らばって置かれ、足の踏み場もない位でした。

霊芝先生はご自分も床の上に座りこんで句選びをしておられました。大きなテーブルもあるのに、それは使わないのです。聞けば生はいつも自宅の二階の畳の部屋でこうして座って仕事をしているとのことでした。黄先生はどんどん資料を床の上に拡げて行きます。その中に日が暮れて夕飯時になり、私は一旦、家に駈け戻り、そこそこに夫と食事を済ませて又仕事に戻りました。仕事は夜中に及びましたが、一人でやれば辛いことも、仲間が居れば楽しくなります。時には「こんな事が書いてありますよ」。と遺稿と拡げで笑う事もありました。先生とご一緒に仕事をした事は後にもなくこの時だけの様です。先生を思い浮かべると、畳の上にあれやこれやと拡げた資料の中で、楽しそうに、というのでしょうか、悪戦苦闘というのでしょうか、そのお姿かよく浮かびます。よい一生を過されたと思います。

私達はつたない力を持ち寄って俳句を続けて参ります。先生、どうぞ天上からこの私達を見守って下さいませ。山のお家から見守って下さったのと同じ様に。敢てさようならとは申し上げません。

冬雨の降るにまかせて霊芝の喪
五色鳥啼くは亡き師をひた偲ぶ

北条千鶴子

台北俳句会会長の黄霊芝先生が、最後に句会に出席なされたのは半年以上前の事になります。

ほんの短い時間椅子に坐っておられましたが、お疲れの為、間もなくお帰りになられまた、大変お痩せになり歩行もご不自由とお見かけ致しました。

この度突然御逝去のお知らせに接し会員一同驚きと悲しみにくれております。台湾が誇るただお一人の天才俳人であられた先生は日本の俳句界においてもその御高名は知れわたり慕われここ数年黄先生にお会いしたい為の來台訪問者は相続いております。

まことに黄先生は台湾俳句会の産みの親であられ、いつのまにか四十五、六年の月日が流れました。会員一同も次第に高齢となり逝去の方々も相継ぎましたが、黄先生が見守って下さるこの会を大切に続けて参りました。

もう二度とお会い出來ない先生の温顔はいついつまでも天国で私共台北俳句会をお護りくださるでしょう。

先生の御恩に報いる為全員協力の下に句会を継けて行きたいと思ひます。

黄霊芝先生のみ魂よ永遠に安かれ。

忘られぬ師の温顔や鳥雲に
陽明山にもはや居ませぬ師の棲家

黄霊芝先生へ　李錦上

台湾に台北俳句会を創立し、貴重な台湾俳句歳時記を上梓なされ私共の俳句会を御指導下さいました黄先生に真心こめて12万分の感謝と御礼を申し上げます。本当に有難うございました。思へば1992年長い教職勤務を定年退職し翌年、私は東京の櫻狩短歌会を経て故王進益氏と故蕭翔文と知りあい台北俳句会に紹介してくれました。先生が私の俳句関係の日本の俳句結社や俳句主宰の先生の事をお聞きして、「句集を出しなさいよ」と再

三勸められましたが遂にお別れとなってしまいました。又高雄の故陳金蓮氏とは好友の仲で私達は古稀の後の三益友、返す返すも残念に思ふのは若しも人生の相遇の機会が少し早かったら最良の思ひ出物語りが綴られませう。月に一度だけの句会にての先生の御親切なる御指導と講評やら、國際的交流でも先生の独特なる御講義は人の心を歡悅の境地に導遊し、一流の諧謔に滿ちた飾り氣の無い率直なアドリブ調には感銘の至りです。

35周年記念に先生から頂いた陶板の句額。「春光に旅立つ玩具宇宙船」これ拜讀し乍ら先生があの遠い西方の極樂聖地へお立ちになったと思へば胸熱く、先生安かれ御深悼申し上げご冥福をお祈りいたします。

春愁や台湾俳師そらをゆく
霊芝師は俳句の字引春悼む
榮譽滿つ台湾歳時記春光る
漢俳に温もり残る水仙花
矢の折れし如くに台湾（しま）の春惜しむ

黄霊芝先生と私

廖運藩

1978年4月、台北俳句会に参加させて頂き、40年近い歳月に造った俳句らしきもの約一萬、その中で霊芝先生のお目にかけた分だけでも一千句以上、但し先生の推稱を受けた作品は一句も無い、と言っても全然無視されたわけでもない。

今から30年前の拙句「水牛の角から濡れる時雨かな」には、澁澁ながら「この句には新しい發見がある」と言って吳れたし、二十年前の俳句会出句「荒磯來て飛沫に濡るる寒の靄」、「冬の波蛇籠を嚙んで戻りけり」、「寒燈のそれより先の野良の闇」には三句纏めて「しつかりと作句してゐる」と講評に書いて下さつた。更に10年前の「日腳伸ぶ鼠の額程の庭」に対し、「遂に出たぞ、好句が」と嬉しそうに煽てて吳れてゐながら、「しかしこの作者は當初猫の額の例へを使ひ、あとで訂正して來たのである。「猫の額」は過去百万遍以上使はれて來た言葉である」と嫌味をつけ足すことを忘れては居なかつた。或嘘つきの爺さんは「先生は褒めませんよ」と言つてゐたが、私は信じては居ない。日本人小学校、日本人中学校で学んだ霊芝先生が、台湾人公学校そして全校の日本人生徒がたつた三人しか居なかつた私立の台湾人中学校出身の私の日本語を「物凄くうまい」と大勢の前で賞讃してくれ、又或る場面で私の客家訛の中國語を「廖さんの中國語は北京語的ですね」と妙な言ひ方で褒めて吳れてもゐるのである、尤もそれらは俳句以外の事柄であり、又私への同庚の誼からと言ふことかも知れない。

黄霊芝先生、長い間色々とありがたうございました。

霊芝逝くその如月の三日月に
御立ちあれ百病癒えし春の鶴

注釈：黄霊芝台北俳句会会長は、2016年3月12日に、享年87歳にて逝去された。4月21日の告別式では、台北俳句会員や福島せいぎ氏など日本の俳人も列席する中、日本交流協会台北事務所沼田代表や、同氏が第二の故郷と称した愛媛県松山市より野志克仁松山市長の弔辞が代読された。同氏の生前の功績、台北俳句会の活動については、2015年6月号に掲載。